

第七講 ナトゥーフ文化

ナトゥーフ期 13000 ～ 10500 bp

終末期旧石器時代に属する

ヤンガードリアスによる劣化した環境と社会

ベーリング・アレレード期の終焉 12900BP (14900 BP~)

温暖期の終焉

ヤンガードリアス 12900-11640 BP

寒冷・乾燥

ヤンガードリアスについての異説

12500BP (ヤンガードリアス期) -41度

11700BP (ヤンガードリアス/ヒュプシサーマル期)

-38.5度

11000-10500BP

ヒプシサーマル期

温暖・湿潤から温暖・乾燥へ

極前線の北上

ナラ林の発生の拡大

ヤンガードリアスの開始

急速な寒冷・乾燥化による環境の激変

ナラ林地帯の縮小と消滅

狩猟採集民のヨルダン川溪谷への集住

生活空間の狭小性→定住的形態を余儀なくさせる

ヤンガードリアスの終焉

急速な温暖・湿潤化

ナラ林地帯の出現と拡大

生活空間の拡大

ヨルダン川溪谷からの分散

遊動的狩猟採集生活に戻る

ヤンガードリアスによる食糧資源の開発

イネ科植物の利用

既存の技術（石製鎌）
プラントオパール
石皿・石杵（製粉用）
イネ科の種子を収穫・貯蔵
大量の石鎌（収穫）、石皿（製粉）、石鉢（製粉）、石杵（製粉）
貯蔵用の穴
食糧の貯蔵が定住を促進

農耕開始以前

定住は生活空間の縮小という外的要因による
狩猟採集経済はナトゥーフ社会を支配
ガゼル・陸ガメ・鳥などを狩猟
若い個体を多く含む
取り出される骨に家畜化に伴う形態変化が認められない
野生種のイネ科や豆類の種子を採集
出土している種子は野生種
多品種多種類

PPNA 10500 ~ 9300/ 200 bp

新石器時代に属する

ナトゥーフ期

終末期旧石器

定住型狩猟採集文化とされる

定住的な生活様式が生まれたのは、13000 年前ごろから数百年続いたオールデスト・ドリラス期の気候乾燥・寒冷化がきっかけ

12500bp 定住始まる←13000 年前ごろから数百年続いたオールデ

スト・ドリラス期（13000-12400bp）の寒冷・乾燥化

死海地溝帯（湿潤で疎林の残存）に集中

人口集中による資源をめぐるストレス

集約的な穀物利用と貯蔵

定住

集落の形成

10800bp ヤンガー・ドリラス

急激な寒冷・乾燥化

死海地溝帯に集中

野生種のムギ類の栽培化

円形の竪穴住居

イネ科の種子を収穫・貯蔵

大量の石鎌（収穫）、石皿（製粉）、石鉢（製粉）、石杵（製粉）

貯蔵用の穴

食糧の貯蔵が定住を促進

確実な鎌刃が現れるのはナトゥーフ文化期、1万4,000年前以降である。野生ムギ類の利用は2万年前くらいには既に始まっていたことがわかっているのに鎌刃の存在ははっきりしない。当初の収穫は素手でおこなわれていた可能性がある。

10300bp 農耕開始

ムギ類とマメ類

穀物栽培と狩猟

8000bp 穀物栽培と牧畜

定住型狩猟社会モデルへの疑問

ナトゥーフ前期：定住性を示す

石材を使用した住居

豊富な大型の石臼

イエネズミやスズメなどの動物遺体

豊富な埋葬遺構

ナトゥーフ後期／晩期：遊動性を示す

豊かさの交代

集落の小型化＝誘導的な居住形態

↑

ヤンガードリアスの影響